

せいけん
詩集

第二十九篇

作：近藤せいけん

「恋文 二」

小田急線本厚木駅徒歩五分 とあるビルの前

毎週土曜日 午後四時過ぎ 若者が待つ

少女はヴァイオリンケースを抱えて

いつものように やつて来る

「こんにちは」

「この間ありがとうございます」

少女が礼を言い 頭を下げる

若者は微笑み 少女を見つめる

「これ 読んで下さい」 少女に手渡す

少女はビルの中に入る 教室に入り

手紙を開く 胸が高まり ときめく

自己紹介の後に 藤村の詩が書かれていた

「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり」

少女はヴァイオリンケースからヴァオリンを出し

心を落ち着かせるため 曲を奏でる

恋という名の 小さな波紋が

広がり 始めた